

補足スライド

『1. 所有の基礎理論』と
『2. 私的所有と市場社会』とへの補足

[2.5] 個人・社会と所有

前近代的共同体と現代市場社会との間での
所有の位置付けの違い

ここでの課題

所有という観点から——

- ✓ 個人と社会との関係をまとめる。
- ✓ 現代市場社会と前近代的共同体との違いをまとめる。
- ↓ それを通じて
- ✓ 現代市場社会の特質を明らかにする。
 - ✓ 人類社会一般との関連
 - ✓ 前近代的共同体との関連

ここでのキーワード

- ⊕ 個人・現代的社会・
前近代的共同体
- ⊕ 人格と物件

1. 個人と社会

1.1 個人

個人からの個人の分離

個人の自立

- そもそも、労働によって形成された人間は自然からだけではなく集団からも自立し、しかも自分の属する集団を自分の運動環境として媒介するものだった。
- これにたいして、動物個体は集団に埋没していた。

前近代における個人の自立

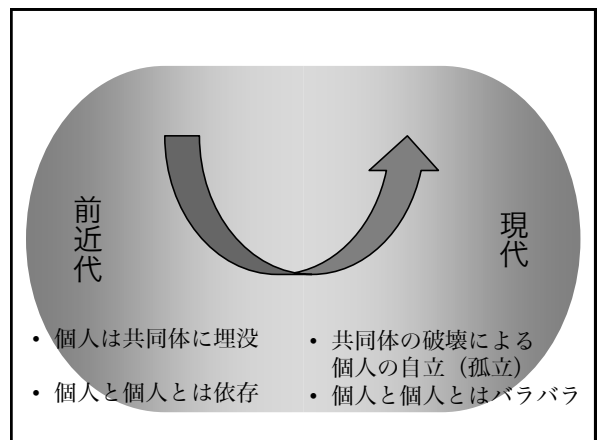
- しかし、前近代的共同体では個人は多かれ少なかれ共同体に埋没していた。
- 共同体こそが主体であり、個人はその付属物であった。
- 個人と個人とは、同じ身分（百姓と百姓）でも、違う身分（殿様と百姓）でも、互いに依存し合っていた。

直接的な人格的依存

- 一方の個人（殿様）が他方の個人（百姓）を直接的に支配するというのも相互的な**人格的依存**の現れである。
 - 百姓が百姓として振る舞うからこそ、殿様が殿様でいられる。
 - || すなわち百姓が支配されるから、殿様が支配する。
 - ↓ それゆえに
 - 百姓こそが殿様を生み出している。

市場社会における個人の自立

- 市場社会になって、ようやく、個人の自立が達成された。
- しかし、それは、個人が共同体から切り離されるという仕方で、達成された。
- 個人と個人とはバラバラになった。すなわち、個人と個人とは対立するものになった。



物件的依存に基づく人格的独立(1)

- 個人からの**個人の人格的独立**の条件は共同体からの個人の分離であった。
- 市場社会における共同体からの個人の分離の達成の条件は、この社会の構成員が互いに、経済的には、市場の外では自覚的に結合していない（本来の社会形成をしていない）ということである。

物件的依存に基づく人格的独立(2)

- 市場の中では、個人と個人とはただ交換を通じて、つまり商品・貨幣という物件を通じてのみ経済的に自覚的な関係を結ぶ。
- 市場においては、個人と個人との**人格的独立**は物件への個人の**物件的依存**に基づいている。

人格と物件

- 人間
 - 生まれた瞬間から誰でも人間
- 人格
 - 社会形成主体としての人間
 - 法的に言うと権利主体
- 物
 - 物体であろうとあるまいと、ものはもの
- 物件（物象）
 - 人格の対象
 - 法的に言うと人格の権利の客体

1.2 社会

社会からの個人の分離

社会の形成

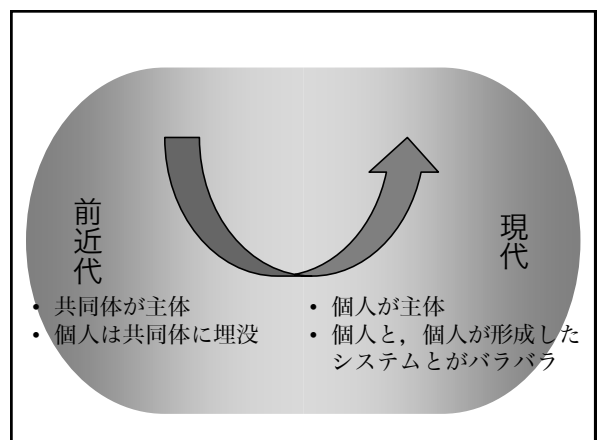
- そもそも、労働による人間の社会の形成は：
 - 自覚的なものであった。それによって
 - グローバルなものだった。
- これにたいして、動物集団の形成は：
 - 本能的・運命的なものであった。
 - 自然に制約されたものであった。

前近代における社会の形成

- しかし、前近代的共同体は本能的集団の制約を完全に超えてはいなかった。
- 前近代的共同体は：
 - 自覚的に形成されたのではなく、すでに運命的に形成されているものであった。
 - 個人は生まれた時から共同体の一員であり、しかも共同体の中で固定化されている役割に従事する。
 - 地縁・血縁に制約されたローカルなものであった。

市場における社会の形成

- 市場社会になって、ようやく、自立的個人によるグローバルな自覚的社会の形成が形式的には達成された。
- しかし、それは、個人と個人との自覚的な関係の結果的・無自覚的な総体という仕方で、達成された。
- 個人と社会とはバラバラになった。すなわち、個人と社会とは対立するものになった。



2. 所有

2.1 所有の内容

所有の内容

- そもそも
所有の正当性は、とことんつきつめると、
労働（＝原因）と所有（＝結果）との一致に
帰着するしかない。
 - 現実において、所有が労働に基づく以上、
意識においても（＝正当性においても）、
そうであるしかない。

前近代における所有の内容

- しかし実際には、
前近代的共同体では、
交換不可能な土地の所有が
労働の前提であった。
- 労働をおこなう行為者自体が
共同体の付属物でしかなかった。
- 共同体そのものは労働に前提される
運命的存在であった。

市場における私的所有の内容

- 市場社会では、労働と所有との一致は、
すべての所有物の交換可能性によって、
しかも労働と交換との分離によって、
形式化され、
それを通じて一般化されている。
 - 商品所持者はタテマエとして
この内容を受け容れざるをえない。
 - 形式的だからこそ、
かえって一般化せざるをえない。

2.2 所有の形式

所有の形式

- そもそも
所有は社会によって、
したがって各個人の社会的意識によって、
つまり自覚によって、
媒介されている。
 - 所有は物質代謝の社会的運営において、
労働を、したがってまた生活を
安定的・効率的に行う上で成立した
対象支配のやり方であった。

前近代における所有の形式

- しかし実際には、
前近代的共同体では、
共同体が主体であって、
各個人はその器官であった。
- したがって、所有は各個人の
共同体への帰属そのものであった。
 - 共同体の階層構造に応じて所有が階層化し、
個人間での承認とは無関係に、
共同体の都合によって所有が変更される。

市場における私的所有の形式

- 市場社会では、私的所有は
交換過程における相互的承認に、
つまり自覚的な社会関係の形成に、
単純化・明確化されている。
- 個人の相互的承認の総体として
社会の承認が形成される。